

- 季節の花：あじさい  
サルスベリ
- コラム：土
- 情報：花のイベント

# ふらっとふらわーず ニュース

- 発行：ふらっとふらわーず
- 2015夏号：第11号
- 連絡先：042-682-2835
- 編集委員：内田信子

## 季節の花

### ★【あじさい】(紫陽花)

アジサイ科  
アジサイ属

アジサイは、世界で広く親しまれている日本産の落葉低木で、初夏に咲く代表的な花木です。丈夫で育てやすく、乾燥しないように気をつければ鉢植えでも庭植えでも容易に栽培することができます。アジサイ、北アメリカに約40種類が分布する低木で、日本には約100種類があります。

アジサイの名前は藍色の花が集まるという意味の「あじさい(集真藍)」が変化したものとされています。漢字表記に用いられる「紫陽花」は、唐の詩人が別の花に付けた名で、平安時代の学者がこの漢字をあてたことから誤って広まったといわれています。属名のハイドラントシアはギリシア語の「水」と「アンドン(容器)からなり「水の器」「水がめ」と解釈されます。これはアジサイが根から非常に水をよく吸うから、など諸説があります。広義には、アジサイ属ハイドラントシア属のうち、椀状や円錐状の花序をつける植物の総称として使われています。原種は日本に自生する「ガクアジサイ」で、椀状の花序の周辺だけに装飾花が咲き、額縁のように見えます。装飾花は雄しべと雌しべが退化して、実を結ぶことはなく、花びらに見えるのは「がく」です。ガクアジサイの中の部分が両性花で、雄しべと雌しべを持ちます。一般にアジサイと呼ばれる「手まり咲き」はガクアジサイの両性花がすべて装飾花に変化したものです。大きな装飾花をつけるようになったのは、昆虫を集めるためと言われています。花色は、土壌の酸性度に影響されます。近年人気なのは、「カシワバアジサイ」は、北アメリカ原産で、葉が落葉樹のカシワに似ているのでこの名前があります。花色は白、円錐状に咲く花が特徴的です。真っ白で非常に大きな花房のアメリカーノノキの園芸品種「アナベル」も、装飾花が多く手まり状になり、花房は直径30cmに達します。

### ◎育て方

**栽培環境**：耐陰性もありますが、花つきをよくするには日当たりのよい場所。やや湿気のある肥沃な土壌を好みます。  
**水やり**：庭植え、鉢植えともに水切れには注意します。  
**肥料**：寒肥は3月までに堆肥などと草木灰を混ぜたものを株の周囲に施し、開花前の5月ごろに油かすなどを施します。  
**作業**：花つきをよくするため、7月上旬から9月中旬に花がら摘みと合わせて、今年伸びた新梢の芽を3〜5個残し剪定。

### ◎花言葉

「移る気」「辛抱強い愛情」「元氣な女性」(花言葉事典より)  
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、ウィキペディア)



アナベル カシワバアジサイ



### ★【サルスベリ】

ミソハギ科  
サルスベリ属

真夏の暑さの中で、次々と花を咲かせ、花色は白、ピンク、紅、紅紫などがあります。花びらは6枚でフチが強く波打ちます。新梢を伸ばしながら枝先に花芽をつくり、夏から秋にかけて次々と開花します。枝の生育にはうづきがあるため、「百日紅」(ひゃくじつこう)の名の通り、百日近くはわたって花が咲き続けます。中国南部が原産で、「百日紅」というのは原産地の中国での呼び名です。日本にやってきた正確な時代は不明ですが、大和本草(1708年)に載っているところから、江戸時代以前だと考えられます。「サルスベリ」と呼ばれるのは、樹皮が褐色で所々はがれて白い肌があらわれ、縞模様になり、その樹皮のはがれた部分にはうづきつるつるしているところから、「猿も滑って落ちる」「猿滑り」というのが、名前の由来とされています。実際には、猿は簡単に登ってしまいうらいですが、多くの樹木は、6〜8月にかけて花芽をつけ、次年度に開花、結実させますが、サルスベリは今年伸びた枝に花芽ができ、同年の春から秋にかけて開花します。そのため冬期に強く枝を剪定して萌芽を促がすと花つきがよくなります。真夏の炎天下でも元気に咲き続ける。この花の生命力にあやかりたいものです。

### ◎花言葉

「雄弁」「愛敬」「活動」「世話好き」(花言葉事典より)  
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、あれびて)



## コラム 縁の下の力持ち

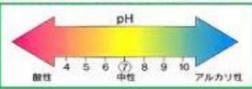
そもそも「土」とは、「大地の表面を一面におおつもの」。だてですが、土壌とは、「作物の育つ田や畑の土」(現代新国語辞典より)という意味です。「土壌」(現代新国語辞典より)という意味で、「土」で取り上げる「土」は「土壌」の事です。土壌の性質は、次の3つに分けられます。①物理性、②化学性、③生物性です。



土の粒の間にすき間があるので、空気や水がよく吸収されます。

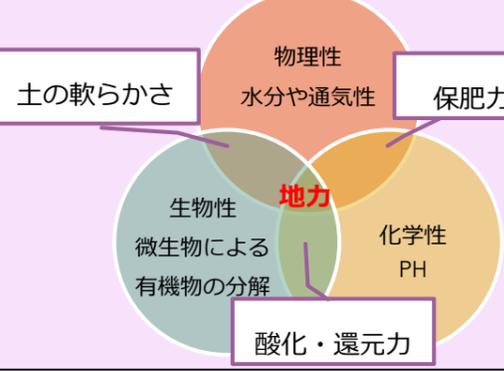
①の「物理性」は、水分や通気性のよしあしの事で、団粒構造という、土壌の粒子が小さなかたまりを形成している構造だと、保水性に富みながら排水性・通気性もよく、作物の生育に適しています。

②の「化学性」は、酸度や養分の量で、多くの植物は弱酸性が好き(pH5.5〜6.5)ですが、サツキ、ブルーベリー、青色のアジサイは酸性好きです。



ピンクのアジサイは中性から弱アルカリ性好きです。強アルカリだと根から栄養を吸収しにくく、強酸性だと根が生育障害を起こします。酸性を中和するために石灰を使用し、アルカリ性を中和するために、ピートモスを使用します。季節の花に登場した、アジサイの青色の花は、酸性土壌でよく発色するので、硫酸を施すとよく、赤色の花は、消石灰や苦土石灰を施し中性から弱アルカリ性にするとうよく発色します。ただ、種によって変化には強弱があり、例えばヤマアジサイは酸性度によって影響される変化は弱く、一概にすべてのアジサイに当てはまる性質とは言えません。

③の「生物性」は、土の中に生息する土壌微生物やミミズや昆虫などの小動物の世界のことです。例えば、稲ワラ(有機物)を土の中に入れると、微生物が分解してくれ、ミミズが耕し、豊かにしてくれます。この3つの性質が単独でなく、絡み合ってバランスが取れた状態が良い土の状態です。植物にとっての良い土とは「水はけがいい、通気性がいい、保水性がいい、保肥性がいい、有機質に富んでいて見た目がきれい、軽すぎず重すぎず、酸度が植物に合っている」という事です。水を含ませた土を水がしたたる程度に強く握り、指で軽く押したとき、ぱらぱらとくずれやすい土が良い土です。握れない土は砂系で保肥性などが悪く、突いても崩れにくい土は粘土質系で通気性や水はけなどが悪い土です。



土は、植物が倒れないように支えとなり、植物にとって生育に必要な養分や水を蓄えて、植物の根を有害物質や温度変化から守ります。まさに植物の土の「縁の下の力持ち」。「ポディガード」「用心棒」といっていいでしょうか。



## 情報

## 花のイベント

- 入谷朝顔まつり  
7月6日(月)〜8日(水)  
台東区入谷鬼子母神、言問通り
- 東京サマーランド あじさい園「アナベルの雪山」  
6月6日(土)〜7月10日(金)  
東京サマーランド
- 座間のひまわりまつり 2015  
8月13日(木)〜8月18日(火)  
座間市座架依橋北側・南側など